

10月20日  
報告

## 「第12回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」と フィールドワークに参加して

中 清司

### 安野へ

安佐町久地を抜け、国道191号線に合流する。谷合を蛇行する太田川に沿って県北の水源に向けて遡る一本道だ。お気に入りのドライブコースだが、2015年に「安野 中国人受難之碑」（以下「受難碑」）があることを知ってから、安野の地名表記を確かめながら通ることになった。安野発電所の脱出シュートのような水圧鉄管を目印に、減速しながら下方にある受難碑あたりを確認する。受難碑は国道から一段高い傾斜地にある為、国道からは直接目にはすることは難しい。トラックが2台あり、テント設営が始まっていることが分かる。集合時間まではまだ時間があるので、失敬してそのまま通り過ぎ、上流にある土居取水口を目指す。

昨年8月5日のフィールドワーク（現地学習）に飛び入りで初参加し、中型バスで4か所の収容所跡・工事現場跡と善福寺を巡った。下流の安野発電所から上流の土居取水口を繋ぐ導水トンネルの総延長が約8kmと聞き、その距離を実感したくて取水口脇のセブンイレブンまで一気に遡った。渋滞のないスムーズな移動だったが、それでも発電所から相当な距離があると感ずる。このトンネルが中国・朝鮮人の手で掘られた。帰りに吉村石材店の看板が河岸に見えた。受難碑を施工した石材店だ。

受難碑に到着し、テント設営に加わる。設営は地元安芸太田町の有志の方が中心である。程なく音響準備の方、継承する会のスタッフ、広島県教職員組合の方が加わり、賑やかに設営と式典準備が進んでゆく。

### 坪野フィールドワーク

マイクロバスで広島駅から来た参加者に、直接安野に駆け付けた参加者が加わり、フィールドワーク



が始まる。この日の予定は坪野フィールドワーク（安野発電所、受難碑、貯水槽）→受難碑前での栗栖薫さんの証言→受難碑前で集い→善福寺で追悼法要→香草収容所跡地と碎石掘り出し口跡地での栗栖さんの証言だ。

40名ほどで普段は入れない安野発電所上部にある貯水槽に移動する。「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」（以下「継承する会」）の事務局長を務める川原洋子さんが往時の工事現場の様子を伝え、設備などの技術的な内容を中国電力の方が説明される。

### 受難碑建立

石碑の建立は受難者の代表者が1993年に西松建設（中国支店）を初訪問した時からの要求であった。2009年10月に西松建設と和解が成立し、その僅か1年後の2010年10月に受難者本人及び遺族を迎え、除幕式を兼ね第1回目の集いが開催されている。調査開始の92年から経過した歳月を一気に取り戻そうとする受難者・遺族・支援者・西松建設の決意と執念、建立に協力した中国電力・安芸太田町の厚情が感じられる。

中央の受難碑裏面に受難者・遺族及び西松建設の

連名で強制連行の経緯、碑建立の経緯と趣旨が簡潔に記されている。両脇の2基の碑には受難者全員360名の氏名が半数の180名ずつ刻まれている。

## 集い

集いは多くの受難者と遺族を迎えた第4回までは半年毎、2012年の第5回以降は年1回、10月に定例開催している。今回で12回目だ。

集い開始まで十分時間があるが、2張のテントに用意した75席のパイプ椅子が次々と埋まって行く。参列者は、再会を喜んだり、碑を間近で確認したり、冊子（継承する会が用意したもの。主催者・来賓のあいさつ全文、碑文、碑のサイズ、受難者全員360名の氏名などを記載）に目を通したり、腹ごしらえをするなど各自各様で開始を待つ。

定刻の13:30に岡原美知子さんの司会と楊小平さんの通訳で集いが開始された。まずは主催者を代表し足立修一が挨拶。

次いで遺族の許立成さ



んが挨拶。許洪奎の息子であることを述べ、仕事で中父の足がいつも水に浸かっていた、右足を悪くし、帰国後働くとき何をしていても思うにまかせなかったこと、悲痛な歳

月を振り返りながら誤った歴史を繰り返さないことを望んでいたことを伝える。今日は父が労働をしたこの現場で戦争が何をもたらしたのかを見聞し、同時に今ある平和と豊かさを嘯みしめたいと述べる。この場では述べられなかったが、許洪奎さんは帰国後故郷に戻って結婚し、5人の子供に恵まれた。しかし、右足の状態が悪化し、1962年に右足のひざ下か



ら切断した。農業ができなくなった父に代わり母が家計を支えたが、生活は苦しかった。

当初は受難者自身の参加もあったが、敗戦後歳月が経過し、現在は専ら受難者の子や孫の世代の参加となっている。

小坂真治安芸太田町長が、この受難碑が安野の地に建立された歴史的経緯に触れ、この碑建立の願いと



同じく、受難の歴史を後世に伝え二度とこのような過ちを繰り返すことのないよう願っていることを述べる。町長の他、現・元安芸太田町議員など多くの地元参加者がおられた。町長のあいさつにある決意が地元で共有され、この碑が“安野”の碑であることを地元の方が受け入れている様子が見えてくる。尚、建設当時の行政区は安野村で、その後周辺地域と合併しながら加計町を経て2004年に現在の安芸太田町となっている。

藤井慧心善福寺住職が関心が広がり、参加が増えることを希望しますと述べる。善福寺では当時安野で亡くなった5人の受難者の遺骨を寺で預かり弔われた。希望者はこの集いの終了後、300メートルばかり移動し善福寺で行われる追悼法要に参加する。住職は2017年に受難者・遺族143名が参加した天津の「在日殉難烈士・勞工記念館」での追悼法要もされた。碑の文字「安野 中国人受難之碑」は、住職の揮毫だ。



西迫利孝広島県教職員組合執行委員長が強制連行の背景には差別意識があり、それが戦争を支えてきたことを強調され、人権尊重を訴えられる。



中華人民共和国駐大阪総領事のメッセージ

を冊子に記載していることと、地元の国会議員から寄せられたメッセージを冊子に挟んでいることを司会者が伝える。

竹内ふみのさんの二胡の演奏のもと参列者全員が献花する。続いて同じく全員で恒例の写真撮影。過ごしやすい日和だった為か、参列者が多く70名ばかりが鮎詰めになって納まる。式を終え一同表情が和む。

## 栗栖薫さんの証言

導水トンネルの碎石の掘り出し口から700mほどのところに西松組（現西松建設）が收容所を建てたが、その中間に栗栖さんの自宅があった。西松組の依頼でお父さんが收容所の監視員をしていた。それで、当時15歳であった薫さんは收容所内部や中国人の作業の様子を知ることができた。調査の初期段階から活動され、広島地裁では証人として当時の中国人の様子を証言した。

### 1) 香草收容所跡地にて受難者の生活を語る

收容所は大元神社へ上る参道に沿って斜面に建てられていた。縦約20m x 横15mの長方形。この内部にトイレや炊事場もある。出入り口は1か所で、窓はない。24時間監視がついた。壁は板を打ち付けた簡易なもので、杉の皮ぶき屋根。現在は杉林に戻っている。

この收容所は中国人100名を收容し、50人ずつが12時間の昼夜交代勤務。休養日はない。三食は小麦を練った握りこぶし大のマントウのことが多かった。毎食1個ずつ出ていたが、1944年末には搾油した後

のどんぐり粉を混ぜたマントウに変わった。副食はなく、味付けをする塩や醤油など調味料さえなかった。中国で支給された布のようなものを肩だすきにして日本に連行されたが、それが布団だった。服も中国で支給され着てきた単衣の服が1枚だけで、1944年末にはボロボロに破れていた。何れも日本での支



栗栖薫さんの証言を聞いて  
涙ぐむ肖翠青さん（右）と許立成さん

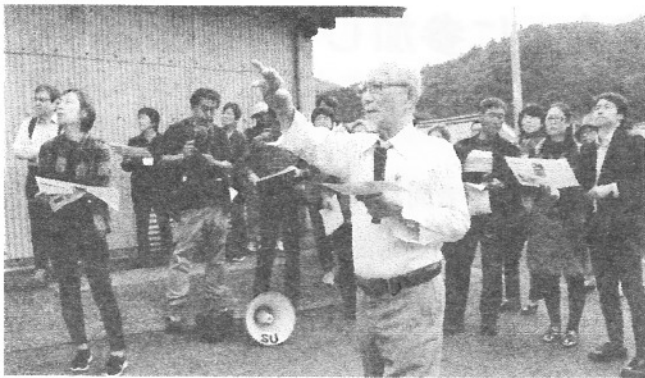
給はなかった。その年の冬は積雪が多く、30cmくらい積もった。燃料の支給はないので、作業が終わった中国人に山に木をとりに行かせた。多くの中国人は過労の為、食後濡れたままの服で寝ていた。他にも逃亡者への制裁のことなど、証言が続いた。（逃亡者は全員連れ戻され、だれ一人逃げ出せていない。）

大元神社の境内にある高さが4mあろうかという巨石に「戦捷（勝）記念碑」と大きく彫られていた。何の戦勝かと近づいてみると「日清・日露・日独」とある。日露戦争は中国東北部の分捕り合戦。第一次大戦では日本はドイツの租借地であった青島に侵攻した。日本の戦場は日清戦争以降常に中国にあった。收容所を見下ろすこの石碑に中国人は何を感じたであろうか。

### 2) 香草碎石掘り出し口にて

#### トンネル掘りと搬出作業の様子を語る

中国人に一度地下足袋が支給されたが、破れると履くものがなく裸足で作業をする人もいた。削岩機で岩盤に穴を開けたり、ダイナマイトを仕掛けるの



香草碎石掘出し口で証言する栗栖薫さん

は作業経験を積んだ朝鮮人。砕かれた花崗岩を手で拾い上げトロッコに入れ、搬出するのが中国人。碎石は鋭利だが、土を敷いたり、板を渡して足場をつくることはない。トンネルが水脈に当たりいつも足元は水浸し、頭上からは水滴が落ちてくる。碎石を踏まず、水に浸からないようなるべくトロッコのレールを踏んで移動するようにしていた。トンネル内の照明は弱く、頼りない。レールはデコボコの地面に敷いたので波を打っていて不安定。トンネルは高所にある。捨て場までは下り坂の右曲がりの急カーブがあり、トロッコはそこでしばしば横転していた。収容所から作業場へ往復する道のそばには医院もあるが、怪我や病気をしても治療して貰うことはなかった。

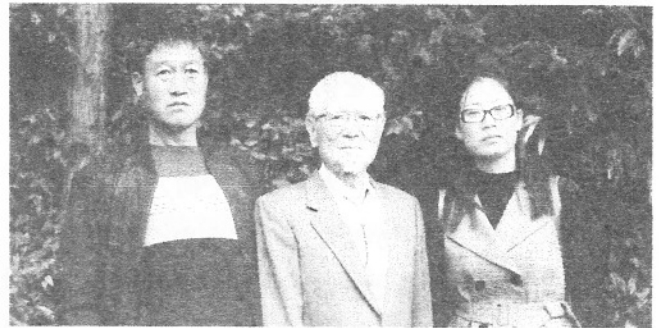
### 3) 遺骨をめぐって

栗栖さんにとっても思いがけないことがあった。敗戦後の11月のある日中国人が一人自動車に轢き殺されたが、その現場を栗栖さんが偶然目撃していた。当日栗栖さんの父が茶毘にふしたが、なんとその翌日連合軍が残っていた中国人全員 317 名を帰国させる為安野から移動させた。この遺骨を中国に持ち帰っていたのが、この日現地を訪ねた遺族・肖翠青さんの祖父・肖吉作さんだった。吉作さんの帰国は身ひとつで、遺骨の他には何1つ持っていなかったという。

### 4) 遺族の反応

現地は当時の地形がそのまま残り、自身が描いた作業場のイラストやマップ・写真を用いて栗栖さんが状況説明し、川原さんが要所要所で補足するので、トロッコの軌道や碎石の山が眼前に現れてくる。部

外者の私でさえ耳を塞ぎ、逃げ出したくなる程なので、許さん、肖さんは身が刻まれ、血の気が引く思いだったと察する。肖さんの目には、栗栖さんの証言の間中涙が溢れていた。栗栖さんも証言中ときおり声を詰まらせる。川原さんから栗栖さんへの質問を促された二人は「よく分かりました」と言うのが精いっぱい質問はできなかった。肖さんが、すべてのフィールドワークが終わった後栗栖さんに求めたのがハグだったので、大いに泣け、ちょっぴり救われた。



許立成さん、栗栖薫さん、肖翠青さん

### おわりに

2015年の夏、中国新聞の記事を頼りに受難碑にたどり着いた。360名全員の氏名を目の当たりにした瞬間、その受難者たちの圧倒的な存在感と無言の圧力に気圧(けお)された。受難の証拠を突き付けられ、あつて欲しくないと願っていたことはあったのだと実感するほかなかった。

余りにも過酷な体験をすと思い出したくないのが人情で、仮に家族に話しても理解されにくい。結果として我が子にさえ体験や事実が伝わらないこと、伝えるには相応の努力が必要なことを、この年(50才代)になって実感している。稀有なことに、安野での受難の実態は中国河北省の河北大学と支援者の尽力で中国・日本双方で解明が進み、記録が残されている。受難者の遺族は何世代隔ててもこの石碑の前に立てば先代の受難を偲び、時空を超えて呼びかけることができる。私も少なくとも年に1度はこの碑の前に立ち、感慨を新たにしたい。そして、継承をする会の活動を通して歴史事実を教わりながら、伝えることもしてゆきたい。